論　説

雍正年間における清朝の青海モンゴル支配の実態
――統属関係への介入と盟旗制の運用を中心として――

岩田　啓介

はじめに

本稿は，雍正２（1724）年に清朝に服属した青海モンゴル(1)に対して，清朝がいかにして支配を確立したのかを分析し，清朝の青海モンゴル支配の実態を考察するものである。

17世紀中葉から約１世紀の間，青海ではグーシ＝ハンの子孫を中心とする青海ホシュート部の首長が割拠し，現地のチベット人を支配するとともに，中央チベットのハンを輩出してダライ＝ラマ政権の保護者としての地位を築き上げていた。しかし，雍正元年８月に青海ホシュート部で内紛が発生すると，清朝は軍を派遣して青海を制圧した(2)。そして雍正帝は，雍正２年５月に川陝総督年羹堯が起案した善後事宜十三条を裁可し，これを基本として青海モンゴル支配を構築していく。そこで清朝は，青海モンゴルに盟旗制を，青海ホシュートの属下にあったチベット人に土司制を適用するとともに，チベットのハンを事実上廃止するなど，チベット仏教世界での青海ホシュートの政治的・経済的権限を失わせたのである。清朝は，ジューン＝ガルが青海へ介入する事態を警戒していたが，当時のジューン＝ガルが清朝との関係改善を目指していたため［澁谷浩一2007：120-123］，このような政策を実施できたのであろう。しかしこの直後から，ジューン＝ガルに逃亡したロブサン＝ダンジンの処遇が問題となり，清朝とジューン＝ガルの関係は悪化していく［澁谷浩一2008］。さらに，雍正５年にチベット政府で内紛が生じると，清朝

はジューン＝ガルのチベットへの介入を防ぐためにジューン＝ガル征討を決定し［柳静我2008］，雍正８年末から10年にかけてジューン＝ガルとの間で戦争に突入した。このように，雍正年間の清朝―ジューン＝ガル関係が流動的な情勢にあったため，両者の狭間に位置した青海モンゴルの重要性は清朝にとって増していった。そこで，清朝が青海モンゴル支配を確立するにあたり，以上のようなジューン＝ガル情勢に対応する施策を実施したと考えられるのである。

ところが，佐藤長［1986：383-423］をはじめとする清朝の青海モンゴル支配に関する先行研究は，青海モンゴルとチベット人との間の統属関係を解消して青海モンゴルに盟旗制を適用したという支配の枠組みを指摘するにとどまっている。このうち，統属関係への介入は，反発が予想される政策であり，青海モンゴルの離反を警戒していた清朝［Perdue, Peter 2005: 248-249］がこれをどのように実施したのかを，当時の情勢を踏まえて分析する必要がある。他方，盟旗制は清朝が外藩モンゴルに広く適用した統治制度であるが，その運用において支配対象の在来の統治構造から影響を受けたことが近年指摘されている［岡洋樹2003］。隣接勢力との関係が不安定な当時，清朝は青海モンゴルに新たに適用した制度の運用方法を模索していたと考えられ，なかでも，旗・佐領を通じて実施した対ジューン＝ガル戦の軍事動員は，盟旗制の運用と浸透の実態を考察するうえで格好の題材といえる。また，統属関係への介入は，支配対象の旧来の統治構造を基本的に改変しなかったという，近年指摘される清朝支配像からみても注目すべき政策であり(3)，盟旗制の運用を含めて青海モンゴル支配全体の中に位置づけて考察しなければならない。

そこで本稿では，清朝が青海モンゴル支配を確立する雍正年間に焦点をあて，青海モンゴルとチベット人の間の統属関係の解消と盟旗制の運用を，流動的な内陸アジア情勢を踏まえて分析し，清朝の青海モンゴル支配構築の実態を明らかにする。

第一章　青海モンゴルとチベット人の統属関係への介入とその影響

清朝は，青海モンゴルを支配するにあたり，それまで青海ホシュートの属下にあったチベット人に土司制を適用するとともに，東チベットのチベット人の一部をダライ＝ラマ政権の管轄下に移行した［小林亮介2010：26-32］。清朝がかかる政策を実施した直接の背景は，チベット人の一部がロブサン＝ダンジンに同調して清朝に敵対したこと［佐藤長1986：394-398］によるが，年羹堯はこの問題の背景を雍正帝に次のように説明している(4)。

> 本朝三藩平定より以後，西海を招撫する者商南多尓濟（チャクナ＝ドルジェ）・阿南達（アナンダ）等は大義を知らず，惟だ利己を圖るのみ。外彛の聲勢を虚張し，百萬の帑金を糜費し，犒賞して休む無し。貢賦は未だ聞かず，數十萬の番徊を以って委ねて之を蒙古に棄て，之を喇嘛に歸す。我が赤子を以って彛の佃戸と爲し，我が民人を以って彛の爪牙と爲す。

ここで年羹堯は，康熙30-40年代に青海やチベット関係の事務を担ったチャクナ＝ドルジェとアナンダ［岡田英弘2013：139，163］の失策により，清朝支配下にあるべきチベット人やムスリムが青海ホシュートに従属して清朝に敵対する事態を招いたと説明している。

他方，雍正帝はこの部分に次のような硃批を記している(5)。

> 起首は乃ち石圖（シトゥ）の錯なり。聖祖は先前時常に悔恨す。此の事は總じて機會無し。遲延して今に至る所以なり。

雍正帝が指摘するシトゥの失策は，順治13（1656）年に青海ホシュート部との間で境界地帯のチベット人の統属関係を決定したこと［青格力2008］を指しており，聖祖康熙帝がこれを悔いていたという。実際，康熙35年８月に西寧近郊のドパ等のチベット人が青海ホシュート部首長層に貢納するのを停止させるよう清朝内部で議論があった際，刑部尚書トゥナは，「彼らに益のある公課を献じるドパの人や，白塔にいる多くの回子や番子らのことをいくら議したとしても，すぐに言に従わないことは明らか」と述べ(6)，康熙帝もその見解に

従い介入を断念している。このように，青海モンゴルの統属関係への介入は，康熙年間からの清朝の課題であり，事件に対する突発的な対応ではなかったといえる。ガルダンと戦争状態にあった時期ほどの危機感があったかは定かでないが，雍正帝も境界地帯の安定を図るうえで青海モンゴルへのチベット人の貢納の解消が必要だと考えたのであろう。

青海モンゴルへのチベット人の貢納は，漢文史料で「添巴」とも記され，青格力［2008：242］は，チベット語の khral ’bab（税）に由来すると推測し，年に一度，穀物や家畜の10分の１を貢納するという『秦辺紀略』の記事を提示している。実際に「添巴」が青海モンゴルにどの程度の収入をもたらしたのかは定かでないが，青海モンゴルに貢納するチベット人は，河州から西寧・粛州・甘州の広範に分布していた［青格力2008］。そのため，清朝の介入により青海モンゴルが「添巴」の収入を失ったことは事実であり，平野聡［2004：155-164］は，これが青海モンゴルの経済的な打撃になったと指摘している。しかし，平野氏は18世紀末以降の状況から推論するにとどまっていることから，続いて雍正年間の青海モンゴルの経済状況と，それに対する清朝の政策を検討していく。

清朝に服属した当初の青海モンゴルには，服属前の戦乱の影響が波及しており，一例として雍正３年２月に青海ホシュートのチャガン＝ダンジン(7)らが掠奪による困窮を申し出たため，銀１万両分の支援を実施したことを年羹堯が報告している(8)。これについて雍正帝は，次のように年羹堯の対応を批判している(9)。

> 爾は僅かに銀一萬兩を發して賑濟の用と爲す。此の諸部落の流離失所の衆，豈に萬金の能く遍濟する所ならんや。……現在如し諸部落の内，或は一二人窘急して萬に自存し難く，潛逃して遠匿し，策妄阿喇布坦（ツェワン＝ラプタン）の地に竄入する者有れば，朕は必ず重く爾の罪を治し，斷じて姑宥せず。

雍正帝は，銀１万両分の援助では不足すると指摘し，青海モンゴルがジューン＝ガルのツェワン＝ラプタンのもとに逃亡することがあれば，その責任を追及すると批判しており，ジューン＝ガルへの逃

亡を防ぐために困窮への対応を徹底しようとしていたのである。

その一方で，チベット人との統属関係解消の影響もあったと考えられ，同年3月に同じくチャガン＝ダンジンらから，従来属下であったチベット人を自身の属下に戻してほしいという要求が提出され，岳鍾琪は以下のように対処するよう雍正帝に提案している(10)。

> 臣査するに喀木（カム）・藏（ツァン）・衞（ウー）の番子の内中に原より向に達賴喇嘛（ダライ＝ラマ）の管轄に屬する者有り。亦た苦苦腦兒（ココノール）諸台吉の管轄する者有り。羅卜藏丹盡（ロブサン＝ダンジン）の叛逆より，達賴喇嘛は順逆を分かたず，遂に喀木・藏・衞の凡そ苦苦腦兒の管する所の番人に屬するを將って盡く收羅を行いて管去したり。中に于いて羅卜藏丹盡等の叛逆したる諸人の屬する所の唐古特（タングート）の部落有り，既已（すで）に人の管轄する無ければ，今達賴喇嘛の爲に管去せらるるは不可なりと爲さず。其の向に苦苦腦兒に屬するは，現在向化したり。封を受けたるの親王插漢丹進（チャガン＝ダンジン）等の原管の喀木・藏・衞の番人は，理として應に仍お苦苦腦兒諸台吉の管轄に歸し，添巴を收納せしめ，其の過活に資すべし。

岳鍾琪は，青海モンゴル（ココノール諸台吉）属下の東チベット（カム）と中央チベット（ウー・ツァン）のチベット人を，清朝がロブサン＝ダンジンの乱後にダライ＝ラマの支配下に移したと説明している。そして，その中で従来チャガン＝ダンジンらの属下であったチベット人を，彼らの属下に戻して添巴を徴収させるべきだと上奏したのである。

一見すると，これは青海モンゴルの経済的安定を目指した雍正帝の意に沿うものと考えられる。しかし，これに対して雍正帝は，次のように懸念を表明している(11)。

> 但だ插漢丹盡等若し喀木・藏・衞の原管の番子を得たれば，勢い必ず又た伊等の邊内の舊屬の番子を討めん。那の時，給せざらんと欲すると雖も，恐らくは難きと爲して便ならざる處有ること，預料せざるべからず。此等の邊内の番子は，向に青海の所屬と爲るに因りて，内外交通して地方を擾亂し，官兵を拒敵す。今甫めて平定し安心して内附す。斷じて插漢丹盡等の添巴

を得ざるの故に因りて更に隙端を啓くべからざるなり。

清朝は，明代後半に修築された辺牆［青海省文物管理局・青海省文物考古研究所2012］を青海での境界と認識していたが，青海モンゴルの服属以前は，辺内にも青海モンゴルへ貢納するチベット人が存在していた。ここで雍正帝は，チャガン＝ダンジンらが辺外のチベット人との統属関係を回復すれば，必然的に辺内のチベット人をも求めることになると危惧している。雍正帝は，青海モンゴルの逃亡を防ぐために銀両の賞賜には積極的であったが，チベット人からの徴税の復活となると，一転して慎重な姿勢を示しているのである。

かかる議論を経た末，雍正３年８月に，結果的に清朝は銀10万両を支出してロブサン＝ダンジンの攻撃で被害を受けた首長への救済とともに，その他の首長に対しても，困窮者への援助や褒賞として銀両や羊・緞子を賞賜した(12)。つまり清朝は，チベット人からの徴税の復活を認めない代わりに，当初の計画の10倍もの銀を支出して青海モンゴルへの経済的支援を実施したのである。また，雍正５年には，青海モンゴルの困窮者に対して西寧道庫の「賑賞蒙古銀」から銀６千余両を給付した事実が史料から確認でき(13)，さらに，雍正８年１月に雍正帝は理藩院尚書テグトに次のような上諭を下している(14)。

聞けば，青海の地に住んでいる扎薩克（ジャサク）旗の者の中に暮らしに苦労する者が数扎薩克いるという。ダナイらはそこで特に事務を処理する者である。このようなことを，いかなるわけで奏聞しないのか。職務を甚だ辱めている。汝らの部院からダナイ・ナイマンダイ・フニンに急ぎ書を送って，青海の扎薩克の中でどの旗の者が苦しみ暮らすことができないのかを明確に調べて，どのように恩を施し，暮らす〔ための〕家産を得させるかを詳細に議して上奏するように。

このように，雍正８年時点で，雍正帝は自ら収集した情報によって，青海モンゴルの困窮を秘匿していた西寧辦事大臣ダナイらを批判するという踏み込んだ対応を取っている。つまり，困窮対策は青海モンゴル服属直後の一時的な施策ではなく，雍正帝の継続的な方針で

あったといえる。当時，雍正帝は対ジューン＝ガル戦への軍備を進めていたため，特に経済的支援を徹底するよう厳しく指示しているのであろう。

以上の検討から，青海モンゴル服属時の戦乱に加え，青海モンゴルとチベット人との間の統属関係を解消した影響で，青海モンゴルでは困窮が広まっていたが，雍正帝は銀両の賞賜等の経済的支援を手厚く実施することで対応していたことが明らかになった。

第二章　対ジューン＝ガル開戦時の軍事動員からみる盟旗制の運用

本章では，前章で明らかにした青海モンゴルのジューン＝ガルへの離反に対する警戒と，青海モンゴルの経済状況への対応を背景として，清朝が盟旗制をいかにして運用していったのかを，対ジューン＝ガル戦への軍事動員に着目して分析する。

盟旗制とは，清朝がモンゴルに適用した統治制度である。盟旗制の基本組織は旗であり，複数の旗が集まって盟が構成された。旗は，清朝が首長の中から選任した扎薩克に管理され，旗のもとに150名の箭丁からなる複数の佐領が組織された。そして，佐領に編制された箭丁は，清朝皇帝から課せられた兵役や貢納を負担する義務を負った。すなわち，清朝による軍事動員は盟旗制の運用と直接結びつくものといえ，その実態を明らかにすることで清朝の青海モンゴル支配の内実に迫ることが可能になる。

（1）青海モンゴルからの軍事動員の決定

雍正７年３月，清朝はジューン＝ガル征討を決定し，東西２路からなる遠征軍の編制を開始した(15)。そして，雍正７年11月に，雍正帝はジューン＝ガルから青海やチベットへと通じる要口（準噶爾通青海西藏之要口）のガス，及びその南に広がるツァイダム盆地に，京城八旗や帰化城等から選抜した兵に加え，青海等30旗から選抜した1500名の兵を，翌夏にかけて駐防させることに決定した(16)。その後，牧地がガスに近いという理由から，青海モンゴルの兵は雍正

9年に出発させることになったが[17]，雍正8年末にジューン＝ガル軍が清朝のガスの卡倫（哨所）を包囲しているとの報告が上がったため，清朝は当初の計画を大きく上回る1万名もの兵を青海モンゴルから動員し，青海の重要地点（青海緊要適中之地）に駐防させることにしたのである[18]。

このように，清朝は，対ジューン＝ガル戦の本格化にともない，青海への侵入を防ぐために青海モンゴルからの軍事動員を実施した。佐藤長［1986：760］は，青海モンゴルが前線に配備されなかった理由を青海モンゴルの軍事力の脆弱さに求めているが，西路軍を率いた岳鍾琪は，むしろ以下のように青海モンゴルへの疑念を示している[19]。

> 蓋し青海地方は平定してより以來，未だ十年に及ばざるに緣り，豈に能く人皆な向化せんや。且つ從前，羅布藏丹盡（ロブサン＝ダンジン）の叛逆の時，而して察汗丹盡（チャガン＝ダンジン）等は尙お皆な人を遣わし諄噶爾（ジューン＝ガル）に向かいて兵を求む。今，逆彛若し青海を犯せば，臣竊慮するに青海の人は但だ我の用を爲さざるのみならず，更に此に藉りて跳梁すること亦た未だ定むべからず。

岳鍾琪は，ロブサン＝ダンジンの反乱の際にチャガン＝ダンジンらがジューン＝ガルに兵を求めていたとして[20]，ジューン＝ガルの攻撃によって青海モンゴルが清朝から離反してしまうと疑っている。このような青海モンゴルへの不信感も根強く存在したため，清朝は青海モンゴル兵の前線への配備をもとより想定していなかったといえよう。

清朝は牧地の防備のために1万名の兵の動員を決定したが，同時に青海モンゴルからの家畜の採買も実施することにし，雍正9年3月後半に兵を整えて集まるよう，青海の扎薩克らに指示した[21]。ただ，清朝が家畜の採買を決定した経緯は定かではなく，その計画の全容も不明である。他方，軍事動員について，ガスに駐箚した副都統ゲメルは次のように懸念を示して動員方法の変更を提案した[22]。

奴才が聞くところ，青海の佐領を編制したとき，1佐領に150

名の壮丁がいるとはいえ，兵はただ50名で，100名は kamciha haha である。今，ツァイダムの地に1000名の兵を駐させた。〔加えて〕青海の地に9000名の兵を集めて彼らの遊牧を守るよう出すには，各佐領で80余名を出す〔ことになる〕。この出した兵は，老若を問わずただ人数がいるけれども，本当に役に立たない。兵といえども兵器が無く，馬畜が少なく牛に載せ徒歩で随って行く者がいるという。聞けば，小人たちは大いに恨んでいるという。……奴才が見ると，青海の者は甚だ小さく愚かで人柄は劣り，貧窮する者も多い。……この中で，郡王プンスク＝ワンジャルの兵はまだ良く，法も厳格で属下をまたよく養う。彼は主の恩を大いに戴いている。奴才が愚考するに，クルルクの地は，イスン・チャガン＝チロートに通じる路である(23)。この周囲に住んだ郡王プンスク＝ワンジャル・貝子ソナム＝ダシ・扎薩克ビチガン＝ツェリン・ダマリン＝セプテン(24)，彼らには20佐領余りある。彼らの牧地は近いので，彼らの佐領から1000名の兵を出して郡王プンスク＝ワンジャルに管轄させるよう駐するのがよい。

ゲメルによると，ツァイダムに青海モンゴルの兵1000名を配備しているが，さらに9000名の兵を動員すると，各佐領から80数名を動員することになるという。ここで言及されているツァイダムの1000名の兵は，当初の計画であった1500名の兵を指していると考えられる。清朝は，雍正３年８月に青海に旗・佐領を編制し，そこで合計29旗108佐領と９の半個佐領が成立した(25)。そして，雍正９年７月時点で，青海には121佐領が存在したといい(26)，１万名の動員には，確かに各佐領から80数名を動員する必要がある。しかし，青海の各佐領には150名の壮丁がいるが，その内100名は kamciha haha であるといい，青海の兵は役に立たないものばかりで，困窮も相俟って怨嗟の声が広まっているという。そこで，プンスク＝ワンジャルの兵が良いので，ツァイダム盆地の北部に位置するクルルクの周囲に牧地を持つ扎薩克から1000名の兵を動員し，彼に兵を管轄させようと提案している。

ここでまず注目すべきは，１万名の兵の動員を青海モンゴル全体の佐領から均一に実施しようとしていたことである。ゲメルが指摘する kamciha haha について，佐領の中で兵が50名に限られるという議論は，清朝が佐領の壮丁を常備軍の馬甲（uksin）50名と予備の閑散100名に分けていたこと［田山茂1954：139，169］が想起される。実際，『朔漠方略』巻16，康熙34年９月甲申（25）日条に「今，49旗から各佐領で，精鋭の馬甲でも附丁でも，５人ずつ数え，合計6600名の兵を選抜したい(27)」という，馬甲と「附丁（kamciha haha）」を併記する用例が確認できる。附丁については，佐領に編制せずに爵位に応じて扎薩克らに分与して兵役等を免除した，随丁を意味する用例も確認できるが(28)，文脈を踏まえると，ここでの kamciha haha は閑散の附丁を指すと考えられ，今回の動員が閑散を含む大規模な計画だったといえる。そこでゲメルは，青海の現状に鑑みて，青海モンゴル全体からの均一な動員ではなく，特定の扎薩克からの動員へと変更するよう提案したのである。

しかし，ゲメルの提案に対して，大学士マルサイらは次のように反論した(29)。

> 調べると，青海の兵を集めることは，特に「ジューン＝ガルの賊が彼らの牧地に来て混乱させるかもしれない。青海の人々は，みなばらばらに住んでいて突然一事が発生すると，すぐに兵を集めることができない。彼らの中に首領となって行う人がいない」と聖主がはっきりと鑑みて，大臣を派遣して扎薩克らと相談し，１万名の兵を出して彼らの子女や牧地を保護するように，と備えさせたものである。この兵は牧地の中におり，全く出征することはない。……ゲメルは知らずに上奏している。

このように，青海から動員する１万名の兵は，前線で戦闘に参加させるのではなく，あくまで牧地を防備するだけなので，動員を実現しさえすればよいと大学士マルサイらは主張している。前述のゲメルの提案も，前線への配備を想定したものではなかったが，大学士マルサイらは，防備のための動員と主張することでゲメルの提案を却下し，青海モンゴル全体の佐領からの均一的な動員を強行しよう

としたのである。

（2）軍事動員にともなう青海モンゴルの動揺

ゲメルとマルサイらの議論に対する雍正帝の裁定を記す史料は管見の限り見出せないが，青海モンゴルには既に1万名の動員が指示されており，その直後から，青海では2つの事件が発生する。第一に，青海ホシュートのラチャブ(30)とトルグートのチャガン＝ラプタンの逃亡で，第二に，トルグートのノルブによる清朝軍への攻撃である。ここでは，特にこれらの事件と，清朝による軍事動員や家畜の採買との関係を検討していく。

清朝は，3月20日に兵を率いて集まるよう扎薩克らに指示していたが，ラチャブとチャガン＝ラプタンは属下を率い，黄河を渡って西南に移動していった(31)。両者は6月に清朝軍に捕縛されたが，移動した経緯をラチャブは以下のように供述している(32)。

> 今年3月に我が旗の管旗章京ナガン＝ダシが我のもとに来て「我が以前から知る河州の地の商人の漢人たちが我のもとに商売しに来て『今，汝らの青海の地の家畜を全て買う。〔今回〕出した兵を〔清朝が軍を〕集めた地に送った後，内（辺内）の土司が兵を出してモンゴルの牧地に派遣し，汝らの子女を監視させる』と我に告げた。この事は甚だ本当だ」と告げた。我の旗の多くの者は，この言葉を聞いて，また我に向かって「この事は甚だ本当のようだ。今，我らの身命に達してしまうぞ。どのようにして生きるのか」と語った。

ラチャブは，兵の動員と家畜の採買の後に，土司が青海モンゴルの子女を監視するという噂を河州の商人から聞き，旗内に動揺が広まったと説明している(33)。ラチャブらの逃亡理由について佐藤長［1986：759-761］は，彼らの勢力が小さく，家畜の採買を逃れるためと推測している。他の史料からも，逃亡の原因を確定できないが，ラチャブらは，大規模な軍事動員が土司の進出や困窮を招くことになると理解したため逃亡したと考えられる。

他方，同年5月29日にノルブが清朝軍に対して攻撃を加えたこと

が，６月13日のフニンの奏摺に以下のように記されている[34]。

伍月貳拾玖日未時に於いて，卡に放きたる鑲藍旗副護軍校四十八・正黄旗前鋒護軍黒哥の報稱する有り「噶蘭大査琳は騰格里（テンゲリ）に駐防したるの兵伍百名を帶領するに，内に青海の兵參百伍拾名有り，伍月貳拾捌日貳更の時分に於いて，扎薩克諾尓布（ジャサクノルブ）は青海の兵丁を帶領し，各廠の馬匹を將って搶奪し，復た衆を率いて戰闘し，竟に馬匹を將って山路に趕入して去る。尚お換卡の青海の兵壹百名有り，已に騰格里を過ぐること壹百餘里，亦た是の夜に於いて各兵の馬匹を將って搶去したり」等の語。……奴才は伏して查するに，騰格里に駐防したる青海の兵丁は，拾數旗の扎薩克の屬下の人に係り，一齊に變を起こす。換卡の兵も亦た是の夜に於いて舉動す。

ノルブは，清朝が青海の十数旗から動員してテンゲリに駐防させた350名の兵を率いて清朝軍と戦闘して逃走し，同時に卡倫の交代のための100名の兵も，馬を略奪して逃走したという。これらの兵は，前掲のゲメルの上奏にて言及されていた，動員済みの1000名の兵の一部を指していると考えられ，その兵はツァイダム盆地の各地に駐防していたのであろう。なお，ここに現れるテンゲリという地名は『世宗実録』でも確認でき，佐藤長［1986：762］はラサ北方のテンゲリ＝ノール（チベット語ではナムツォ）に比定し，ノルブが中央チベットに動員されたと解釈した。しかし，このテンゲリは満文で tenggeli と表記され，テンゲリ＝ノール tenggeri noor とは表記が異なる。雍正２年にツァイダム盆地を経由して逃亡したロブサン＝ダンジンの捜索状況に関する年羹堯の奏摺にて tenggeli という地名を確認でき[35]，ここでのテンゲリがツァイダム盆地の地名であることは疑いない[36]。

ノルブは，清朝軍を攻撃して間もなく，６月中に清朝に捕縛され，反乱を起こした経緯を以下のように供述している[37]。

今年の春，……グンゲが「……今また聞くところによると，青海の１万名の兵を出した後，我らの牧地を内に移して我らから家畜を取るという。我ら自身は，妻子や家畜から離れればどの

ように暮らしたらよいのか」と語った後，まもなく我はすぐに兵を率いてテンゲリに行った。……〔グンゲのもとに派遣した〕リタルが戻って来て「グンゲが『今，全ての青海の扎薩克たちが叛いた。汝らはテンゲリにいるので，そこの兵の家畜の群れを追い立てて連れて来い。……』と告げた後，……」と言っていた。

ノルブの説明では，ホイトのグンゲ［佐藤長1986：493］から，清朝が青海モンゴルの牧地を辺内に移して家畜を奪うという情報を得たという。そして，青海の全ての扎薩克が反乱を起こしたので，それに同調するよう説得されたと主張しているが，ここでのグンゲの言葉は，ほとんどの扎薩克が逆に鎮圧に協力したという事実と異なっている。実際，ノルブが率いた兵は清朝が十数旗から動員した兵であり，同調した首長もほとんどいなかったため，ノルブの行動は突発的なものであったといえ(38)，先述のラチャブらの逃亡とも直接的な関連は見出せない。しかし，ノルブの反乱も，ラチャブらの逃亡と同様に，大規模な軍事動員が青海モンゴルの生活基盤を揺るがす事態を招くと誤解されたため生じたといえ，これは軍事動員に関する先述のゲメルの懸念が的中したものといえるだろう。

（3）善後処理における青海モンゴルからの軍事動員の後退

清朝は，以上の混乱を引き起こしたノルブを西寧の口外で処刑し，ラチャブとチャガン＝ラプタンをそれぞれ近親者のもとで厳重に管理させることにして，混乱を収拾した［佐藤長1986：765］。ただ，清朝軍は6月にホトン＝ノールでジューン＝ガル軍に敗北するなど，清朝にとって戦況は深刻化しており，依然として青海の防備を整える必要があった。そこで，6月末に大学士マルサイは，青海の兵の動員を整然と処理するよう西寧に駐箚したダナイに指示し，それを受けたダナイらは現状と今後の対応に関する提案を上奏し，まず動員に関する現状を次のように報告している(39)。

今，臣我らが会して調べると，青海には合計30扎薩克121佐領ある。この内，貝勒額駙アボー(40)の旗の兵を800名近く出して

バルクルに送った。扎薩克台吉イケ＝アラプタン・ハルガス・セプテン＝ボショクト・ツェリン＝ナムジャル(41)，この４扎薩克には僅かに５佐領と少ないうえ，みなツァイダムの地にいる我らの満洲・緑旗兵と１つの地に接壌して住んでおり，青海の兵の駐した地から遠く離れている。公であったラチャブと扎薩克台吉であったチャガン＝ラプタンは，この旗の者を率いて逃げ，まだ元の地へ全ては戻って来ていない。この７旗にある合計20佐領の兵を除いて出さないほか，残ったものはようやく23扎薩克，合計101佐領である。１佐領に150名の壮丁がいる。ツァイダムの駅站に駐させたモンゴル以外に，また１万名の兵を出すとき，各佐領で100名近い壮丁を出すことになる。……奴才我らが到着して見ると，衆扎薩克の内，定数通りに揃えたものもいる。集める兵が多くなるので，本当に出すことができずに事情を告げて人数を揃えなかったものや，少し欠けるものもいる。今，集めた兵を大まかに数えれば，7000名近く集まっている。……先に青海の者が暮らすとき，各家には公課を徴収するバルカム（東チベット）の地の番子が甚だ多い。……ロブサン＝ダンジンの乱で，これらの番子をみな彼らから離したので，暮らしは以前のようではない。……今，兵を集めた地が非常に遠いわけではなく，彼らの牧地の中にいるとはいえ，兵を集めた地に駐すれば，各家から離れてしまう。……このようになって久しくなったので，小人たちが恨んで話すことをなくすことはできない。

青海の121佐領の内，逃亡したラチャブとチャガン＝ラプタンらの佐領を除く101佐領から１万名の兵を出す場合，各佐領から約100名の兵を出すことになると計算しているが，現時点で集まっている兵は約7000名にとどまっていたという。そしてダナイは，ロブサン＝ダンジンの乱後に清朝が青海モンゴルとチベット人との間の統属関係を切り離したため，青海モンゴルの暮らし向きが以前のようではなくなり，牧地から長期間離れることはできないとして，ゲメルと同様の懸念を表明している。

そこでダナイらは，青海からの軍事動員について次のように提案するのである[42]。

今，集めた兵の中からただ3000名を選抜して，馬畜・兵器を大いに整えてしかるべく台吉と官員を選び駐させたい。アシガン＝ウス・チャガン＝トロガイからウラン＝ブラク[43]に至るまでは同じ路の地であるうえ，青海の中でツァイダムに通じる大路である。この3000名の兵を，しかるべく営を分けて，これらの地の間で牧地や水場を代えて移動して駐させたい。……今，戦に出した郡王エルデニ＝エルケ＝トクトナイ・プンスク＝ワンジャル・公アラプタン＝ジャムス・アラプタン[44]，この４人の中で王プンスク＝ワンジャルと公アラプタンは，今見ると，全ての事に尽力する。王エルデニ＝エルケ＝トクトナイと公アラプタン＝ジャムスは，年老いているので行動が遅くなっている。「この２人は老境に差し掛かった」と旨を下して戦に出すのをやめて，この２人の缺について，トルグートの扎薩克台吉ドゥンは年が若いうえ，人柄はなお尽力しているように見える。更に，額駙アボーの旗の兵を出さなかったとはいえ，アボーの牧地は兵の駐した地から甚だ近く，内（清朝内）の法令を知るので，プンスク＝ワンジャル・アボー・アラプタン・ドゥン，この４人を戦に出して２班に編成してしかるべく交替し，奴才ジュンフォボー我らとともに兵を管轄するよう駐させたい。

このように，青海湖の東から西北のツァイダム盆地に至る路に，動員済みの7000名の兵から選抜した3000名の兵を，プンスク＝ワンジャル・アボー・アラプタン・ドゥンの４人の扎薩克に統率させて輪番で防備を展開するよう提案したのである。このダナイらの提案は，ゲメルと同様に，信頼の置ける特定の扎薩克に委任しようとするものであり，青海モンゴル全体からの１万名の兵の動員という当初の計画から大幅に後退したものといえる。

この提案について，雍正帝は以下のように上諭を下し，基本的にダナイらの提案の通りに実施することとした[45]。

朕の此の兵を聚める所以の者は，特に伊等の家口及び遊牧を保

全する爲の計にして，征伐調遣の用の爲に非ざるなり。其の生計の情形，從前俱に未だ聞知せず。今，達鼐等の陳奏に據るに，朕の心は甚だ惻然爲りて，從容に料理するを俟ち，必ず恩を加うるの處有り。今聚むる所の兵七千名より，著して三千名を選派せしめよ。

このように，雍正帝は青海モンゴルの経済状況を知らなかったとして，前述のダナイの提案通りに動員の規模を縮小し，特定の扎薩克に委ねることに決定したのである。前章で明らかにした通り，雍正帝は青海モンゴルの経済状況を注視して積極的に経済的支援を実施していた。しかし，軍事動員にともなう混乱を通じて，雍正帝はその支援が不十分であったと認識するに至り，全ての佐領からの大規模な動員を諦めて，信頼の置ける特定の扎薩克への委任へと方針転換せざるを得なかったのである。

お　わ　り　に

本稿では，清朝が青海モンゴルの服属に際して実施した政策のうち，青海モンゴルとチベット人との間の統属関係の解消と盟旗制の運用実態を検討した。そして，従来は清朝が諸制度を適用した事実が指摘されるのみであったが，青海モンゴルの服属直後の雍正年間において，それらが以下のように運用されていたことを明らかにした。

清朝は，青海モンゴルとチベット人との間の統属関係を解消し，それぞれに盟旗制と土司制を適用した。これは，少なくとも康熙30年代以降，清朝が境界地帯の安定のために課題として認識していたものであり，青海を支配するにあたって支配の安定を実現するために特に実施した政策であった。しかし，これにより青海モンゴルはチベット人からの「添巴」による収入を失うことになったため，雍正帝は青海モンゴルの離反を防ぐために手厚く経済的支援を実施した。

また，雍正８年末からジューン＝ガルと開戦した清朝は，青海の防備のために青海モンゴル全体の佐領を通じて１万名の兵を動員す

ることにした。現地の官員からは，困窮等の青海モンゴルの実情に照らして動員方法の変更が提案されたが，清朝は１万名の動員を強行した。しかし，大規模な軍事動員に不安を感じた一部の首長が清朝から逃亡し，反乱する事態となったため，雍正帝は，それまでの経済的支援が不十分であったと認識するに至り，兵の動員数を3000名に削減して信頼の置ける特定の扎薩克に委ねるという妥協案を採用したのである。

清朝は，ジューン＝ガルとの関係が悪化の一途をたどった当時の状況下で，青海モンゴルの安定的な支配を模索した結果，以上のような政策を実施して制度を運用していったのである。なかでも注意すべきは，青海モンゴルとチベット人との間の統属関係の解消という，旧来の秩序への介入が，経済的な援助や盟旗制の運用における妥協を強いられてもなお徹底されていたことである。近年，清朝支配の柔軟性や多元性が指摘されており，確かに，青海モンゴル支配においても，社会の内情に配慮した制度の柔軟な運用が確認できる。ただ，その一方で，青海モンゴルとチベット人との間の統属関係は，支配の安定を妨げると判断されたため，解体が徹底されていたのである。このように，新たに支配を確立し安定的な支配へと移行する流動的な局面に着目することにより，旧来の秩序の解体の徹底と制度の柔軟な運用という，清朝支配の一面が浮かび上がってくるといえるのではないだろうか。

史料

『宮中檔雍正朝奏摺』国立故宮博物院編，1977-1980年

『欽定大清会典事例（嘉慶朝）』近代中国史料叢刊３編，文海出版社，1991年

「録副」：「軍機処満文録副奏摺」中国第一歴史檔案館所蔵（出典として檔号を記した）

「康熙朝満文硃批奏摺」筑波大学附属図書館所蔵マイクロフィルム

『親征平定朔漠方略』満文版：*Beye dailame wargi amargi babe necihiyeme toktobuha bodogon i bithe*，京都大学図書館所蔵，漢文版：『西北史地文献』5-6，1990年

『世宗実録』：『大清世宗憲皇帝実録』華文書局，1964年
『彙編』：『雍正朝漢文硃批奏摺彙編』中国第一歴史檔案館編，江蘇古籍出版社，1989-1991年
『雍正朝漢文諭旨匯編』中国第一歴史檔案館編，広西師範大学出版社，1999年
『雍正朝内閣六科史書・戸科』中国第一歴史檔案館編，広西師範大学出版社，2008年
『全訳』：『雍正朝満文硃批奏摺全訳』中国第一歴史檔案館訳編，黄山書社，1998年

参考文献

岩田啓介2009「新ダライ＝ラマ六世認定をめぐる清朝の対青海ホシュート部・チベット政策」『満族史研究』８，pp.1-23
岡洋樹2003「東北アジア地域史と清朝の帝国統治」『歴史評論』642，pp.50-59
岡田英弘2013『康熙帝の手紙』藤原書店（原版：中央公論社，1979年）
小林亮介2010「近代東チベットにおける中蔵境界問題の形成」筑波大学博士学位論文
斉光2009「「ロブザン＝ダンジンの乱」前後における青海ホシュート部の動向」『内陸アジア史研究』24，pp.39-64 →［斉光2013: 142-173］
佐藤長1972「ロブザンダンジンの反乱について」『史林』55-6，pp.1-32 →［佐藤長1986：383-423］
————1973a「近世青海諸部落の起源―上―」『東洋史研究』32-1，pp.78-106
————1973b「近世青海諸部落の起源―下―」『東洋史研究』32-3，pp.61-88 →［佐藤長1973a］とともに［佐藤長1986: 425-520］
————1986『中世チベット史研究』同朋舎出版
澁谷浩一2007「ウンコフスキー使節団と1720年代前半におけるジューン＝ガル，ロシア，清の相互関係」『人文コミュニケーション学科論集』2，pp.107-128
————2008「1723-26年の清とジューン＝ガルの講和交渉について――18

世紀前半における中央ユーラシアの国際関係――」『満族史研究』7，pp.19-50
杉山清彦2015『大清帝国の形成と八旗制』名古屋大学出版会
田山茂1954『清代に於ける蒙古の社会制度』文京書院
羽田明1982『中央アジア史研究』臨川書店
平野聡2004『清帝国とチベット問題――多民族統合の成立と瓦解――』名古屋大学出版会
柳静我2008「カンチュンネー暗殺と清朝の対応――雍正期，対チベット政策の一側面――」『満族史研究』7，pp.51-79

納・才仁巴力編2014『徳都蒙古地名例釈』民族出版社
斉光2013『大清帝国時期蒙古的政治与社会――以阿拉善和碩特部研究為中心――』復旦大学出版社
青海省文物管理局・青海省文物考古研究所2012『青海省明長城資源調査報告』文物出版社
青格力2008「17世紀中後期的衛拉特与河西走廊」『欧亜学刊』8，pp.221-244

Perdue, Peter 2005, *China Marches West: The Qing Conquest of Central Eurasia*, Cambridge, Mass., Belknap Press of Harvard University Press

註

（1） 本稿では，清朝に服属する以前のグーシ＝ハンの子孫を中心とする勢力を「青海ホシュート部」とし，清朝への服属後は「青海ホシュート」と表記する。また，青海ホシュートを含む青梅のモンゴル遊牧勢力をまとめて表記する場合に「青海モンゴル」と表記する。

（2） いわゆるロブサン＝ダンジンの反乱に関する最新の研究は，斉光［2013：142-173］を参照。

（3） モンゴル支配から清朝全体の帝国統治を考察した岡洋樹［2003］や，八旗制研究から清朝支配に迫った杉山清彦［2015］を参照。また，杉山清彦［2015：419］は，清朝支配を「一定の制約を条件として多様なものを多様なままに共存させるしくみ」として，時に厳しい制約を課す場合

はあっても，基本的には支配対象の旧来の秩序が維持されたと説く。

（4） 無年月の川陝総督年羹堯の奏摺『宮中檔雍正朝奏摺』26輯，pp.425-426。本朝自三藩平定以後，招撫西海者商南多尓濟・阿南達等不知大義，惟圖利己。虚張外彛之聲勢，糜費百萬之帑金，犒賞無休。貢賦未聞，以數十萬之番徊委而棄之於蒙古，歸之於喇嘛。以我赤子爲彛佃戶，以我民人爲彛爪牙。

（5） 前掲註（4）の年羹堯の奏摺。起首乃石圖之錯。聖祖先前時常悔恨。此事總無機會。所以遲延至今。

（6） 『親征平定朔漠方略』巻28，康熙35年8月甲申（1）日条。cende aisingga alban jafara doba i niyalma, šanggiyan subargan de bisire geren hoidz, fandz sebe udu gisurehe seme uthai gisun daharakūngge iletu，ここでの議論は，羽田明［1982：158-161］が部分的に論じている。

（7） グーシ＝ハンの第5子イルドゥチの孫で当時の青海の最有力者［佐藤長1986：461-465］。

（8） 雍正3年2月11日付の岳鍾琪の奏摺『宮中檔雍正朝奏摺』3輯，p.827.

（9） 雍正3年2月21日付の年羹堯への上諭『雍正朝漢文諭旨匯編』1冊，p.115。爾僅發銀一萬兩爲賑濟之用。此諸部落流離失所之衆，豈萬金所能遍濟。……現在如諸部落内或有一二人窘急萬難自存，潛逃遠匿，竄入策妄阿喇布坦之地者，朕必重治爾罪，斷不姑宥。

（10） 雍正3年3月14日付の岳鍾琪の奏摺『彙編』4冊，pp.622-623。臣查喀木藏衞番子内中原有向屬達賴喇嘛管轄者。亦有苦苦腦兒諸台吉管轄者。自羅卜藏丹盡叛逆，達賴喇嘛不分順逆，遂將喀木藏衞凡屬苦苦腦兒所管番人盡行收羅管去。于中有羅卜藏丹盡等叛逆諸人所屬唐古特部落，既已無人管轄，今爲達賴喇嘛管去不爲不可。其向屬苦苦腦兒，現在向化。受封親王插漢丹進等原管喀木藏衞番人，理應仍歸苦苦腦兒諸台吉管轄，收納添巴，資其過活。

（11） 雍正3年3月14日付の岳鍾琪の奏摺への上諭『彙編』4冊，pp.623-624。但插漢丹盡等若得喀木藏衞原管番子，勢必又討伊等邊内舊屬番子。那時，雖欲不給，恐有爲難不便處，不可不預料。此等邊内番子，因向爲青海所屬，内外交通擾亂地方，拒敵官兵。今甫平定安心内附。斷不可因插漢丹盡等不得添巴之故更啓隙端也。

(12)　雍正３年８月28日付のオライらの奏摺『全訳』上，pp.1199-1200.

(13)　雍正５年９月８日付の允祥らの題本『雍正朝内閣六科史書・戸科』40冊，pp.238-239.

(14)　雍正８年正月18日付のテグトへの上諭「康熙朝満文硃批奏摺」機構包16，680-681コマ。donjici huhu noor i bade tehe jasak i gūsai urse i dorgi banjirede suilara urse udu jasak bi sembi, danai se tubade cohotoi baita icihiyara niyalma, ere gesengge be ai turgunde donjibume wesimburakū, tušan be ambula gūtubuhabi, suweni jurgan ci danai, naimandai, funing de hahilame bithe unggifi, huhu noor i jasak i dorgi yaci gūsai urse yadame banjici ojorakū, getukeleme baicafi adarame kesi isibume banjire hethe bahabure babe, kimcime akūmbume gisurefi wesimbukini

(15)　『世宗実録』巻79，雍正７年３月丙辰（12）日条。

(16)　『世宗実録』巻88，雍正７年11月甲戌（４）日条。

(17)　『世宗実録』巻94，雍正８年５月乙未（28）日条。

(18)　『世宗実録』巻102，雍正９年１月乙亥（11）日条。

(19)　雍正９年正月20日付の岳鍾琪の奏摺『彙編』19冊，pp.835-840。蓋縁青海地方自平定以來未及十年，豈能人皆向化。且從前羅布藏丹盡叛逆之時，而察汗丹盡等尚皆遣人向諄噶爾求兵。今逆彝若犯青海，臣竊慮青海之人不但不爲我用，更恐藉此跳梁亦未可定。

(20)　雍正元年２月にチャガン＝ダンジンは，ロブサン＝ダンジンの要求に抗しきれずに，属下を使節団の一員としてジューン＝ガルに派遣していた［斉光2013：156-161］。

(21)　雍正９年４月15日付のダナイらの奏摺（「録副」1108-1）に，「２月30日に到着して，青海の衆扎薩克らに，派兵と駱駝・馬・羊の購入のために旨を下して……『……各々の牧地に行って兵を数の通りに出して，３月20日になおチャガン＝トロガイの地に集まりに来い』と委ねて（juwe biyai gūsin de isinjifi, huhu noor i geren jasak sede, cooha tucibure, temen, morin, honin udara jalin hese wasimbufi, …… meni meni nukte de genefi, cooha be ton i songkoi tucibufi, ilan biyai orin de, kemuni cagan tologai bade isanju seme afabufi,）」とある。

(22)　雍正９年４月21日付のゲメルの奏摺「録副」1116-3. aha donjici huhu

noor i niru banjibuha fonde, emu nirude emu tanggū susai haha bicibe, cooha damu susai, tanggū kamciha haha, ne caidam bade minggan cooha tebuhe, huhu noor i bade uyun minggan cooha isabufi, ceni nuktere be tuwašame tuciburengge, niru tome jakūnju funcere niyalma tucibumbi, ere tucibuhe cooha sakda asigan be bodorakū, damu ton bisire gojime, yargiyan i baitakū, cooha seci, cooha agūra akū, morin ulha komso, ihan de acime yafagan dahalame generengge bi sembi, donjici buya urse mujakū gasambi, …… aha tuwaci huhu noor i urse umesi buya fucihūn, niyalma eberi yadarengge inu labdu, …… erei dorgide giyūn wang punsuk wangjal i cooha kemuni sain fafun inu cira, fejergi urse be ujirengge inu sain, i umesi ejen i kesi be hukšembi, aha mentuhun i gūnici, kurluk ba serengge isun cagan cilootu de hafunara jugūn, ere šurdeme tehe giyūn wang punsuk wangjal, beise sonomdasi jasak bicigan cering, damarin sebten esei orin niru funcembi, ceni nuktere hanci be dahame, ceni niru ci minggan cooha tucibufi giyūn wang punsuk wangjal be kadalabume tekini,

(23)　いずれもツァイダム盆地の北部の地で，イスン・チャガン＝チロートは沙州へ通じる要路に位置する（『世宗実録』巻108，雍正９年７月丙寅（５）日条，［納・才仁巴力編2014：106］）。

(24)　プンスク＝ワンジャルはグーシ＝ハンの第６子ダライ＝バートルの曽孫で，康熙45年から清朝の保護下にあった［岩田啓介2009：15］。ビチガン＝ツェリンは彼の甥に当たる。ソナム＝ダシはグーシ＝ハンの第８子サンガルジャの孫で，ダマリン＝セプテンはグーシ＝ハンの第２子オンボの曽孫である［佐藤長1986：453-454，471-474，479］。

(25)　雍正３年８月28日付のオライらの奏摺『全訳』上，pp.1197-1198.

(26)　雍正９年７月６日付のダナイらの奏摺「録副」1116-7。佐領数が増えているのは，アラシャン＝ホシュート部のアボーが青海に移住していた［斉光2013：189-203］ためであろう。

(27)　te dehi uyun gūsa de, niru tome haha sain uksin ocibe, kamciha i haha ocibe sunjata bodome, uheri ninggun minggan ninggun tanggū cooha sonjome tucibuki, 今請於四十九旗毎佐領或精壮甲丁或附丁以五名筭，共挑選六千六百名。

(28)　『欽定大清会典事例（嘉慶朝）』巻751（理藩院，儀制）の随丁に関する康熙44年の覆准に，「台吉等に各おの隨従附丁有り（台吉等各有隨従附

丁)」とある。

(29)　雍正 9 年 5 月 6 日付のマルサイらの奏摺「録副」1116-4. baicaci, huhu noor i cooha be isaburengge, cohome jun gar i hūlha, ceni nukte de jifi burgišabume yabure be boljoci ojorakū, huhu noor i urse gemu son son i tehebi, gaitai emu baita bihede, emu erinde cooha isabume jabdurakū, ceni dolo turulafi yabure niyalma akū seme enduringge ejen hafu bulekušefi, amban be takūrafi, jasak sai emgi hebdeme, tumen cooha tucibufi, ceni hehe juse, nukte be karmatakini seme belheburengge, ere cooha nukte i dolo tembi, umai coohalame yabure ba akū, …… gemel sarkū de wesimbuhebi,

(30)　当時の青海モンゴルの最有力者チャガン＝ダンジンの甥［佐藤長1986：466-467］。

(31)　『世宗実録』巻106, 雍正 9 年 5 月癸亥（1）日条。

(32)　雍正 9 年 7 月 6 日付のダナイ・ジュンフォボーの奏摺「録副」1109-1. ere ilan biyade, mini gūsai gūsa be kadalara janggin nagan dasi, mini jakade jifi alahangge, mini daci takara ho jeo ba i hūdai nikasa, mini jakade hūdašame jifi minde alahangge, te suweni huhu noor i ba i ulha be yooni udambi, tucibuhe cooha be isabuha bade unggihe amala, dorgi tusy cooha be tucibufi, monggoso i nukte de unggifi, suweni hehe juse be tuwakiyabumbi seme alaha, ere baita umesi yargiyan sembi, mini gūsai geren urse, ere gisun be donjifi, geli mini baru, ere baita umesi yargiyan gese, te musei ergen beyede isinjimbikai, adarame banjimbi seme gisurehe,

(33)　ツァイダム盆地での築城のために土司が動員されるなど，土司の活動が影響を及ぼしていたと考えられる（雍正 9 年 5 月 6 日付の馮允中らの奏摺『彙編』20冊, pp.501-502）。

(34)　雍正 9 年 6 月16日付のフニンの奏摺『彙編』20冊, pp.744-748。於伍月貳拾玖日未時，有放卡鑲藍旗副護軍校四十八・正黄旗前鋒護軍黒哥報稱，噶蘭大査琳帶領駐防騰格里兵伍百名，内有青海兵參百伍拾名。於伍月貳拾捌日貳更時分，扎薩克諾尓布帶領青海兵丁，將各廠馬匹搶奪，復率衆戰鬪，竟將馬匹趕入山路而去。尚有換卡青海兵壹百名，已過騰格里壹百餘里，亦於是夜將各兵馬匹搶去等語。……奴才伏查，駐防騰格里青海兵丁，係拾數旗扎薩克屬下之人，一齊起變。換卡之兵亦於是夜舉動。

(35)　雍正２年３月13日付の年羹堯の奏摺『宮中檔雍正朝奏摺』29輯, pp.623-637.

(36)　納・才仁巴力編［2014：143-144］によると，現在の海西蒙古族蔵族自治州都蘭県に田格里という地名が確認でき，ここでのテンゲリに当たると考えられる。

(37)　雍正９年７月３日付のゲメルとフニンの奏摺「録副」1108-14. ere aniya niyengniyeri forgon, …… gungge minde gisurehengg, …… te geli donjici, huhu noor tumen cooha tucibuhe amala, musei nukte be dosi guribufi, museci ulha gaimbi sembi, musei beye, juse sargan, ulha ci fakcaci, adarame banjimbi seme gisurehe manggi, goidahakū bi uthai cooha be gaifi, tenggeli de genehe, …… litar amasi jifi alahangge, gungge i gisun, te gubci huhu noor i jasak se gemu ubašaha, suwe tenggeli de bisire be dahame, tubai coohai adun be dalifi gaju, …… seme alaha manggi, …… sembihe,

(38)　佐藤長［1986：763］は，ノルブが１人だけ遠く中央チベットのテンゲリ＝ノールに動員されたため，不公平な負担に不満を抱き反乱を起こしたと推測したが，実際には他の首長と同様にツァイダム盆地に配備されたので，特にノルブの負担が重かったわけではない。

(39)　雍正９年７月６日付のダナイらの奏摺「録副」1116-7. te amban be acafi baicaci, huhu noor de uheri gūsin jasak, emu tanggū orin emu niru, erei dorgide beile efu aboo i gūsai cooha be jakūn tanggū isime tucibufi, bar kul de unggihe, jasak i taiji ike arabtan, hargas, sebten bošoktu, cering namjal ere duin jasak de damu sunja niru, komso bime gemu caidam de bisire musei manju, niowanggiyan tui coohai emu bade ujan acame tehebi, huhu noor i coohai tehe baci sandalabuhangge goro, gung bihe lacab, jasak i taiji bihe cagan rabtan, ere gūsai urse be gaifi ukafi, amasi da bade yongkiyame isinjire unde, ere nadan gūsade bisire uheri orin nirui cooha be sufi tuciburakūci tulgiyen, funcehengge teni orin ilan jasak, uheri emu tanggū emu niru, emu nirude emu tanggū susai haha bi, caidam i giyamun tebuhe monggoso ci tulgiyen, geli tumen cooha tucibure de, niru tome tanggū isire haha tucibure de isinambi, …… ahasi be isinjifi tuwaci, geren jasak sei dorgide, bilaha ton i songkoi jalukiyahangge inu bi, isabure cooha labdu ojoro jakade, yargiyan i tucibume muterakū ofi turgun

be alafi, ton de jalukiyahakū, majige eden ekiyehun ningge inu bi, ne isabuha cooha be murušeme bodoci, nadan minggan isime isahabi, …… neneme huhu noor i urse banjire de, boo tome alban gaire barkʻam ba i fandz umesi labdu, …… lobdzang danjin i facuhūn de, ere jergi fandz sebe gemu cenci aljabure jakade, banjirengge nenehe gese akū, …… ne cooha isabuha ba udu hon goro akū, ceni nukte i dolo bicibe, cooha isabuha bade teci, uthai meni meni booci aljahabi, …… uttu bihei inenggi goidaha manggi, buya urse gasame gisurere be akū obume muterakū,

(40)　アラシャン＝ホシュート部の扎薩克で，清朝宮廷内で育った［斉光2013：100-102］。

(41)　イケ＝アラプタンはグーシ＝ハンの第２子オンボの孫アラプタンと考えられる。また，ハルガスはグーシ＝ハンの弟セレン＝ハタン＝バートルの曽孫，セプテン＝ボショクトはグーシ＝ハンの第７子ホルムシの孫，ツェリン＝ナムジャルはグーシ＝ハンの兄ハクナ＝トシェートの後裔である［佐藤長1986：454, 477, 481-482, 484-485］。

(42)　前掲註（39）のダナイらの奏摺。ne isabuha coohai dorgici, damu ilan minggan silifi, morin, ulha, agūra hajun be umesi teksilefi, acara be tuwame teisulebume taiji, hafan be sonjome tucibuki, asigan usu, cagan tologai ci, ulan bulak de isitala emu jurgan i ba bime, huhu noor i dulimba, caidam de hafunara amba jugūn, ere ilan minggan cooha be acara be tuwame kūwaran faksalafi, ere jergi ba i sidende ongko muke be halanjame gurime tebuki, …… ne cooha de tucibuhe giyūn wang erdeni erke toktonai, punsuk wangjal, gung arabtan jamsu, arabtan ere duin niyalmai dorgide, wang punsuk wangjal, gung arabtan be ne tuwaci, eiten baita de beye sisame facihiyašame yabumbi, wang erdeni erke toktonai, gung arabtan jamsu se sakdara jakade, yaburengge sitashūn ohobi, ere juwe be se baru oho seme hese wasimbufi cooha de tucibure be nakafi, ere juwe i oronde, turgūt i jasak i taiji dung, se asigan bime, tuwaci niyalma kemuni faššambi, jai efu aboo i gūsai cooha be udu tucibuhekū bicibe, aboo i nukte coohai tehe baci umesi hanci, dorgi fafun kooli be sara be dahame, punsuk wangjal, aboo, arabtan, dung ere duin niyalma be cooha de tucibufi juwe idu banjibufi, acara be tuwame halanjame aha jungfoboo meni emgi cooha kadalame

tebuki,

(43)　アシガン＝ウスは西北から青海に流れる川で，チャガン＝トロガイは青海東岸の草原地帯，ウラン＝ブラクは青海の西の現在の徳令哈に位置する［納・才仁巴力編2014：21, 153］。

(44)　エルデニ＝エルケ＝トクトナイはグーシ＝ハンの第３子ダランタイの孫，アラプタン＝ジャムスはグーシ＝ハンの第５子イルドゥチの裔でチャガン＝ダンジンの甥，アラプタンは青海のジューン＝ガルのジョリクト＝ホショーチの裔である［佐藤長1986：457, 466, 489-491］。

(45)　『世宗実録』巻108, 雍正９年７月丁丑（16）日条。朕所以聚此兵者，特爲保全伊等家口，及遊牧之計。非爲征伐調遣之用也。其生計情形，從前俱未聞知。今據達鼐等陳奏，朕心甚爲惻然，俟從容料理，必有加恩之處。今所聚兵七千名，著選派三千名。

（筑波大学人文社会系特任研究員）

to its development.

Based on the above findings, the author concludes that the Sui Dynasty's economic concerns gave top priority to granary facilities geographically adjacent to canals, while the Tang Dynasty's political concerns about the joint administration of its two capitals greatly influenced a change to overland transportation. Therefore the roles played by granaries of the two Dynasties also developed from economic to political.

The Actual Situation of the Qing Dynasty's Rule over the Qinghai Mongols during the Yongzheng Era: Qing's Intervention in the Ruler-Subject Relationship and the Utilization of the League-Banner System

IWATA Keisuke

This article investigates the actual situation surrounding the way in which the Qing Dynasty established its rule over the Mongols of Qinghai in the second year of the Yongzheng Era (1724). The research to date has shown the framework of Qing rule, including the League-Banner (盟旗) system, while the present article focuses on the dissolution of the Qinghai Mongol subjugation of the Tibetans and how the League-Banner system was actually utilized, in order to clarify Qing rule within the fluid situation characterizing Eurasia at that time.

When the Qinghai Mongols were subordinated under the Qing Dynasty, the Qing court then dissolved the ruler-subject relationship between the Qinghai Mongols and the Tibetans. This dissolution policy, which had been under deliberation at the Qing court since the Kangxi Era (1662-1722), was designed to stabilize the Dynasty's rule over Qinghai. On the other hand, since this same policy caused the impoverishment of the Qinghai Mongols by preventing them from exploiting the Tibetans, Emperor Yongzheng provided generous economic aid in the form of awards of silver, in order to prevent them from seceding from the Qing. After opening hostilities with the Zunghars at the end of the 8th year of Yongzheng (1730), the Qing Dynasty ordered ten thousand troops to be mobilized from the *niru* (佐領) of the Qinghai Mongols

to act as a border defense force. However, some of the chieftains of the Qinghai Mongols had misgivings about such a large scale mobilization, took flight and revolted against the Qing. In response, Emperor Yongzheng, perceiving the Court's economic support had been insufficient, decided to reduce the number of troops to be mobilized and turn mobilization over to specific banner chieftains appointed by the Qing Dynasty as *jasak* (扎薩克).

Although such conditions on the ground forced the Qing Dynasty to economically support the Qinghai Mongols and to make compromises concerning how to utilize the League-Banner System, the ruler-subject relationship between the Qinghai Mongols and the Tibetans was judged to have destabilized Qing rule, and the Qing Dynasty dissolved it completely. By focusing on the fluidity in the transition to establishing stable rule over the Qinghai Mongols, the author has brought into relief one aspect of Qing rule; that is, changing the status quo through flexible operation of existing governance mechanisms.

The Value of a Fragment from Lu Dian's *Shiliao Lu* as a Historical Source: The Notebooks of Lu You

HONG Sungmin

In the study of the Liao 遼 Dynasty's governance of the Yanyun 燕雲 region one important historical source is an account concerning tax reductions implemented by Liu Liufu 劉六符 in the Yanyun region contained in Lu You's 陸游 notebook entitled *Laoxuean Biji* 老学庵筆記. Although the research to date has questioned the reliability of this account, it has failed to explain why Lu You would have included such a dubious account among the historical records he copied into his notebook. In this article, the author, through a comprehensive study of the historical records related to the Liao Dynasty contained in *Laoxuean Biji* and Lu You's another notebook entitled *Jiashi Jiuwen* 家世旧聞, attempts to clarify the origins of the tax reduction account.

As the title, *Old Recollections About Family History*, implies, *Jiashi Jiuwen* is a collection of narrative passed on to Lu You from his grandfather Lu Dian 陸佃 and father Lu Zai 陸宰. Some of the volume's information pertaining to the Liao was provided by Lu Dian's recollections concerning